

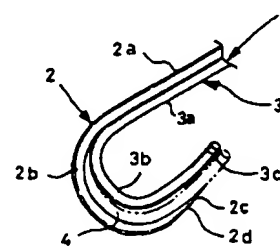
JP 406 68 A
FEB 1994

(54) FISH HOOK

(11) 6-22668 (A) (43) 1.2.1994 (19) JP
(21) Appl. No. 4-178676 (22) 6.7.1992
(71) MUNETAKA TEZUKA (72) MUNETAKA TEZUKA
(51) Int. Cl. A01K91/06, A01K83/00

PURPOSE: To avoid the weakening of the body of a decoy ayu fish as much as possible.

CONSTITUTION: The fish hook for a decoy ayu fish is characterized by disposing an auxiliary fish hook 3 in parallel to a main fish hook 2, piercing the anal fin of the decoy ayu fish with at least the bent tip 3d of the main fish hook 2d and nipping a part of the anal fin with the part 3b of the auxiliary fish hook 3.



(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平6-22668

(43) 公開日 平成6年(1994)2月1日

(51) Int.Cl. ⁵	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
A 0 1 K 91/06 83/00		Z 8303-2B 8303-2B	A 0 1 K 91/06	C

審査請求 未請求 請求項の数 8 (全 4 頁)

(21) 出願番号 特願平4-178676

(22) 出願日 平成4年(1992)7月6日

(71) 出願人 591247019

手塚 宗孝

栃木県栃木市平柳町3-29-46

(72) 発明者 手塚 宗孝

栃木県栃木市平柳町3-29-46

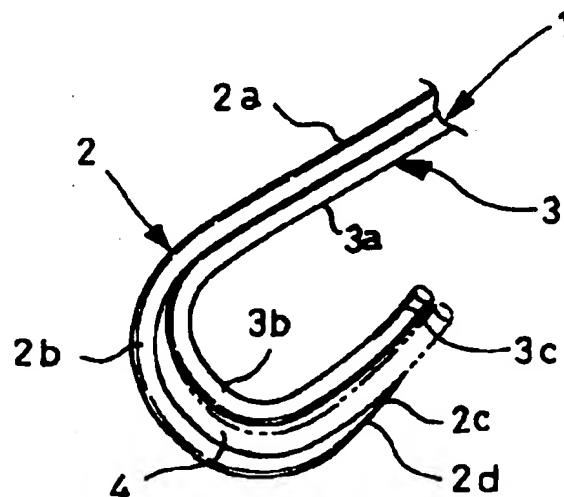
(74) 代理人 弁理士 白浜 吉治

(54) 【発明の名称】 魚釣りバリ

(57) 【要約】

【目的】 オトリアユの魚体を可及的に弱らせることを避ける。

【構成】 主バリ2に補助バリ3を併設し、主バリ2dの少なくとも先曲がり3dをオトリアユの尻ヒレに刺すとともに、補助バリ3の部分3bで尻ヒレの一部を挟むようにしたオトリアユバリ。



【特許請求の範囲】

【請求項1】軸、腰曲がり及びハリ先を形成した先曲がりを有する主バリと、前記軸の内側に一体に固定し、前記主バリの腰曲がり及び先曲がりに沿って曲げて併設した補助バリとから構成した魚釣りバリ。

【請求項2】前記補助バリの先端を円弧に形成してある請求項1に記載の魚釣りバリ。

【請求項3】前記補助バリの先端を該補助バリの断面径よりも大きい球状に形成してある請求項2に記載の魚釣りバリ。

【請求項4】前記補助バリの先端を折り返してある請求項2に記載の魚釣りバリ。

【請求項5】前記補助バリの先端に弾性キャップを被着してある請求項1に記載の魚釣りバリ。

【請求項6】前記補助バリの前記主バリの腰曲がり及び先曲がりに沿う部分は、少なくとも該先曲がりのハリ先側への弾性性向を有する請求項1に記載の魚釣りバリ。

【請求項7】軸、腰曲がり及びハリ先を形成した先曲がりを有する第1及び第2バリの両軸の横側を互いに一体に固定し、該2個のハリの前記腰曲がり及び先曲がりの間に0.3～2mmの間隙を形成してある魚釣りバリ。

【請求項8】先曲がりを有し、該先曲がりとは該先曲がりに連なる腰曲がり相当部位との間の間隙を0.3～2mmに形成してある魚釣りバリ。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】この発明は、魚釣りバリ、特に、鮎の尻ヒレに刺すためのハリに関する。

【0002】

【従来の技術】アユ（鮎）の友釣りにおいて、オトリアユの魚体に仕掛けを付けるには、一般に、鼻カン、逆さバリ及び掛けバ리를連結した糸を使用し、鼻カンを魚体の鼻に通し、逆さバ리를尻ヒレの付け根に刺すことで、掛けバ리를支持している。

【0003】アユの友釣りにおいて、野アユが釣れた場合には、それをオトリアユとして使用することができるので、オトリアユの魚体に対する傷は一回ですませることができるが、野アユが直ぐ掛るとは限らない。次の野アユが釣れるまでには、釣り場の状態によっていわゆる根がかりや流れて来るゴミを引っ掛けて逆さバリが魚体から外れることがある。こうしたことがたび重なると、オトリアユの魚体が更に傷ついて弱り硬直し、オトリアユが泳がないようになってしまう。そうすると、野アユはオトリアユを相手にしなくなり、釣果が著しく低下する。

【0004】アユの友釣りによる釣果は、オトリアユの魚体が元気があるかないかの状態に大きく左右される。従って、この発明は、逆さバ리를魚体に浅く刺すことで、魚体を可及的に弱らせないように構成することを課

題とする。

【0005】

【課題を解決するための手段】この発明に係る魚釣りバリは、軸、腰曲がり及びハリ先を形成した先曲がりを有する主バリと、前記軸の内側に一体に固定し、前記主バリの腰曲がり及び先曲がりに沿って曲げて併設した補助バリとから構成してある。

【0006】好ましい実施例では、前記補助バリの先端を円弧に形成してあること、前記補助バリの先端を該補助バリの断面径よりも大きい球状に形成してあること、前記補助バリの先端を折り返してあること、前記補助バリの先端に弾性キャップを被着してあること、及び前記補助バリの前記主バリの腰曲がり及び先曲がりに沿う部分は、少なくとも該先曲がりのハリ先側への弾性性向を有することを含む。

【0007】この発明に係る魚釣りバリの別の構成態様では、軸、腰曲がり及びハリ先を形成した先曲がりを有する第1及び第2バリの両軸の横側を互いに一体に固定し、該2個のハリの前記腰曲がり及び先曲がりの間に0.3～2mmの間隙を形成してある。

【0008】この発明に係る魚釣りバリの更に別の態様では、先曲がりを有し、該先曲がりとは該先曲がりに連なる腰曲がり相当部位との間に0.3～2mmの間隙を形成してある。

【0009】

【実施例】図面を参照して、この発明に係る魚釣りバリの実施例としてのアユバリについて説明すると、以下のとおりである。

【0010】図1は、一部を省略したアユバリの斜視図を示す。ハリ1は、主バリ2と、これに併設した補助バリ3とから構成してある。

【0011】主バリ2は、金属から製した公知のアユバリであって、軸2aと、腰曲がり2bと、ハリ先2cを形成した先曲がり2dとを有する。図示してないが、もとより、ハリ1は、軸2aの端（上端）にいわゆるチモト（耳）をも有する。

【0012】補助バリ3は、金属、合成樹脂又はゴムから製し、曲げに対して弾性を有し、軸3aを軸2aの内側に一体に固定し、他の部分3bを腰曲がり2b及び先曲がり2dに沿って曲げ、先端3cをハリ先2cよりも突出させてある。図示では、腰曲がり2b及び先曲がり2dと、これらに沿う部分3bとの間に間隙4を生じさせてあるが、これは、先端3cを軸3a側へ押圧したとき、部分3bが腰曲がり2b及び先曲がり2dから離れてきたもので、鎖線で示すように、通常は部分3bの外側（少なくとも先端3c）が腰曲がり2b及び先曲がり2dの内側に軽く接触するようにしてあることが好ましい。もっとも、間隙4が常時生じているようにしてあってもよいが、その場合の間隙4は、2mm以下であることが好ましい。また、部分3bは、腰曲がり2b及び

先曲がり2dに対して横へ若干ずれていてもよいが、この場合には、必然的に常時間隙4が生じ、それも2mm以下が好ましい。先端3cは、ハリ先2cよりも突出していることが好ましいが、ハリ先2cと同じ位置でもハリ先2cよりも引っ込んでいてもよい。

【0013】補助バリ3を例えば金属から製した場合、先端3cが魚体に刺さることを避けるため、先端3cを円弧に形成してあることが好ましい。更に、図2(A)に示すように、先端3cを補助バリ3の断面径よりも大きい球状に形成したり、図2(B)に示すように、先端を折り返し又は曲げたり、先端3cにゴムキャップ5を被着したりしてあってもよい。

【0014】図3は、前記ハリ1と同様に、軸の端(上端)のチモトを省略した別の実施例のアユバリの斜視図を示す。ハリ11は、前記主バリ2の腰曲がり2bに相当する部位11bを、ハリ先11cを形成した先曲がり11dに対して間隔Sが0.3~2mmになり、かつ、軸11aが先曲がり11dとは反対側へ屈曲部11eを介して離間するように形成してある。

【0015】図4及び図5は、前記ハリ1と同様に、軸の端(上端)のチモトを省略した更に別の実施例のアユバリの斜視図を示す。ハリ21、31は、金属から製した公知の2個のアユバ리를併設したものであって、軸21a、31aと、腰曲がり21b、31bと、ハリ先21c、31cを形成した先曲がり21d、31dとを有する。ハリ21、31は、それぞれ、両軸21a、31aの横側を一体に固定し、両腰曲がり21b、31b及び両先曲がり21d、31dの間に0.3~2mmの間隙Sを形成してある。図5に示すハリ31は、軸31aを先曲がり31d側へ屈曲部31eを介して近寄るよう

に形成してある。

【0016】図1に示すハリ1の場合には、主バリ2の少なくとも先曲がり2dをオトリアユの尻ヒレの付け根を除く該ヒレに刺し、その刺した部分と補助バリ3の部分3bとの間で該ヒレの一部を挟む。

【0017】図3に示すハリ11の場合には、少なくとも先曲がり11dをオトリアユの尻ヒレの付け根を除く該ヒレに刺し、その刺した部分と部分11bとの間で該ヒレの一部、好ましくはその硬い骨の部分

を挟む。

【0018】図4及び図5に示すハリ21、31の場合には、少なくとも先曲がり21d、31dをオトリアユの尻ヒレの付け根を除く該ヒレに刺し、その刺した両部分の間で該ヒレの一部、好ましくはその硬い骨の部分

を挟む。

【0019】ハリ1、11、21、31の前記使用例において、これらが間隙4、Sの長さ以上に前記ヒレに刺さることはない。

10 【0020】

【発明の効果】この発明に係る魚釣りバリ、特にアユバリによれば、従来のようにオトリアユの魚体の尻ヒレの付け根ではなく、神経が通っていないといわれる該ヒレに刺し、その一部を挟むようにしてあるから、ハリを該ヒレにだけ刺しても、ハリが該ヒレから容易に外れることがないとともに、そのようにハリを刺すから、魚体に対する傷つけを最小限にとどめて魚体をいきいきさせて長持ちさせ、釣果を上げることができる。

20 【0021】また、ハリは魚体の背ヒレ用としても使用することができる。

【図面の簡単な説明】

【図1】この発明に係るハリの第1の実施例を示す、一部を省略した斜視図。

【図2】A、B、Cは、第1の実施例のハリの補助バリの先端部の各例を示す斜視図。

【図3】この発明に係るハリの第2の実施例を示す、一部を省略した斜視図。

【図4】この発明に係るハリの第3の実施例を示す、一部を省略した斜視図。

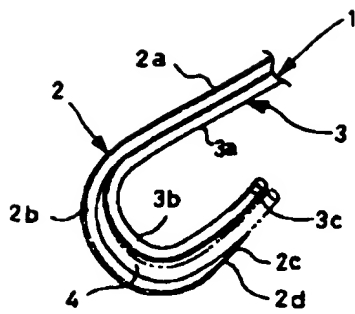
30 【図5】この発明に係るハリの第4の実施例を示す、一部を省略した斜視図。

【符号の説明】

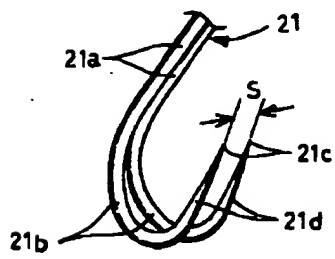
1, 11, 21, 31 ハリ
2a, 11a, 21a, 31a 軸
2b, 11b, 21b, 31b 腰曲がり
2c, 11c, 21c, 31c ハリ先
2d, 11d, 21d, 31d 先曲がり
3 補助バリ
4, S 間隙

40

【図1】



【図4】



【図2】

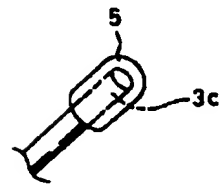
(A)



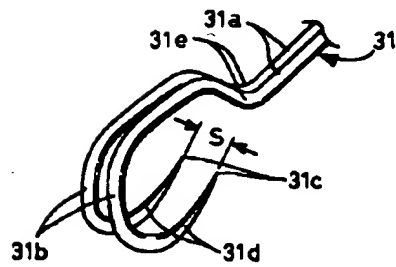
(B)



(C)



【図5】



【図3】

